

《企画書》

提出者 内田 ユミ (ルーヴルの魔女)

【タイトル】

「絵画の向こう側」
～西洋絵画から読み解く快適に生きるヒント～

【概要】

西洋絵画の背景に広がる物語から、迷いの多い現代人へ多角的なヒントを提示します。神話や宗教、有名画家の生涯などから、現代に生きる私たちにも有益なエッセンスを引き出します。時代や場所を超えて生きた人々とも、私たちは何かしらで結びついています。人類全体に通じる観念と、特定の社会が育む文化について知ることが、より深い人間理解の鍵になるのです。現代に生きる人々は、絵画という文化遺産を通して、かつての人たちの考えを知り、今を生きる術に応用できます。私は、この普遍的なつながりを「文化的な絆」と呼び、大切に見つめ、読者の方に必要なヒントを届けていきたいと考えています。

【想定する読者ターゲット】

- ①絵画鑑賞の入門者：楽しみとしてアートに触れたいひと。美術館で、何を見たら良いかわからないひと。観光としては美術館に行く層
- ②絵画愛好家：絵画鑑賞のより深い楽しみ方を求めているひと。教養として絵画に触れたいひと。一般的な知識だけでは物足りなく感じている層
- ③ビジネス層：アートから仕事への視点の広げ方や、新たな思考法を取り入れたいひと

【構成案】

第1章 女神「ヴィーナス」と豊かさ

美の女神ヴィーナスが体現する豊かさは、現代人にとって、どんなものに相当するでしょうか。ギリシア・ローマ神話の世界から続く、人間に根源的に備わった豊かさの観念についての視点を提示します

第2章 伝令の神「ヘルメス」のコミュニケーション

ギリシア神話では、ヘルメスは主神ゼウスの伝令役とされています。ですが、単なる「お使い」には収まりきらない多彩な役目を担う神です。ヘルメスの巧みな立ち回りから、複雑な人間関係の中で生きる現代人に、多くの示唆を見出します

第3章 「ディオニュソス」と「アポロン」が示す本能と理性

ギリシア神話を代表する2柱「ディオニュソス」と「アポロン」に象徴される、人間の本能と理性についての考察。神々のエピソードが描かれた絵画作品から、私たちが自分の衝動や願望を取り扱う方法を学びます

第4章 イエスと癒し

西洋絵画のなかでも、大きなボリュームを占めるキリスト教絵画について、「癒し」という観点から紹介。よく知られる絵画作品のなかから、信仰に関わらず、現代人にも受け取りやすいエピソードを通して、絵で癒される体験を味わいます

第5章 人々の罪

「罪」がテーマのエピソードは聖書によく登場します。この章では、主に旧約聖書の主題と絵画の関係に着目しながら、どんな人の心の中にも存在する「罪」という概念について深く掘り下げます

第6章 レオナルド・ダ・ヴィンチと才能

西洋美術史上、最大の天才とされるレオナルド・ダ・ヴィンチ。ルネサンスという時代背景と、画家の生い立ち、才能を発揮した数々の分野を通して、才能を使って生きるとはどういうことか、生き方のヒントを探ります

第7章 アンリ・ルソーと才能

20世紀フランスの「素朴派」の画家。独学で絵を学んだルソーの生涯と絵画をとおして「他者からの評価」と「自分からの評価」という、現代人が悩みがちなテーマについて掘り下げます

第8章 バロックの天才たち

西洋美術史上には、「光と闇の魔術師」と呼ばれる画家が複数存在しています。バロック時代に輝かしい功績を残した「カラヴァッジオ」「ベラスケス」「レンブラント」にフォーカスし、それぞれの画業の違いを比較します。同時代に活躍した画家の差異を見出すプロセスから、私たちが自分自身の個性を大切に扱う術を取り込みます。

【サンプル原稿】

第7章 アンリ・ルソーと才能

アンリ・ルソーは 20 世紀フランスの画家です。代表作「蛇使いの女」や、「眠るジプシー女」は、鑑賞者を惹きつける強力な魅力を放ち、現代でも人気のある画家の一人です。

ルソーは、「素朴派」（プリミティヴィズム）と称されます。「素朴」という単語には、あたたかさや、誠実さのようなイメージが感じられます。けれど、その一方で「単純な」「単調な」といった、「洗練されていない」というニュアンスも示します。

とくに「素朴な」という形容詞を、芸術作品について使った場合には、発言者の意図に、ネガティブに偏った意図が含まれることも少なくないでしょう。自分の作品について「素朴」と言われた場合、評された画家の多くは、褒め言葉ではなく、まるで発展途上の作品と揶揄されたような感覚を持つこともあるのではないのでしょうか。

この章では、その「素朴派」を代表する「アンリ・ルソー」をテーマにします。前章は「レオナルド・ダ・ヴィンチと才能」というテーマでしたが、まったく異なる切り口になります。ではさっそく、ルソーが画業が始めるきっかけから紐解いていきましょう。

(第 7 章の見出し案)

- ・パリ市入市税関職員 40 歳のルソーが、なぜ画家になったのか？
- ・この時代の画家のスタンダードな経歴と比較！
- ・ルソーが目指したスタイル
- ・幻想と、現実と
- ・自分が世界をどう捉え、何を表現するか？
- ・ピカソからの評価
- ・それでも絵を描きたかった

(以上となります よろしくお願いたします)